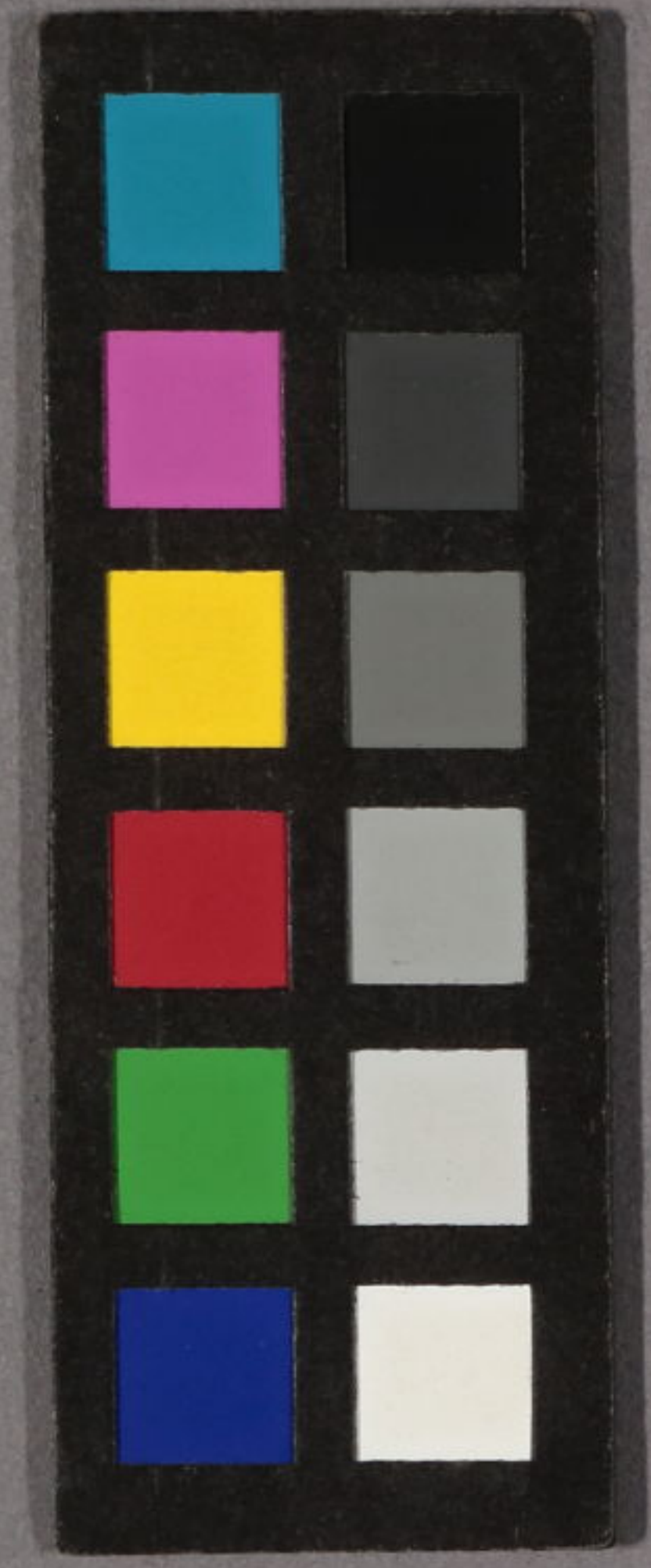


録
貝
人
娘
九

^ 13
3165
9 4



日 へ 13
 3165
 9

珠明三人娘第三編卷之下

東都

松亭金水編次

第五回

前八回より、八回、小娘ひまき、浦あ通、西の巨島の
 貨を収めて、表はさう不空、まじり、格を造るの家多く。
 廊下、お整制、の、昔のこと、く、や、ゆ、東の例、の、新
 古の、乃、鼻、あ、ひ、の、賣、ト、竹、細、工、吉、井、越、下、何、で、自、か、せ、由、見
 世の、擇、ど、り、十九、文、箱、木、の、壺、屋、様、の、ま、か、ひ、の、冊、次、小、原

昭和十年
 七月四日
 購求

とう株家の緒綯をつひけし煙草のいと新獲しこおぼの
 へ貴人ふ廊下限のちあしこる本なる通客堂の茶室の
 あまぐら早足お「コウお待さん何歎け佳のち佳ああ
 宅いよの裏あうごとのらみごつけ「イヤさささんどのり
 アマ昔併らこらみぞ些笑ふ物があるも眺てとまの
 とう。疎おお見おまなり。今日いか天気の宜せ
 縁やうごじます。まよと脱夜うらの異さとのりら
 主中ごあしちやアぶらひません「左様サ遅るもある

けさど。照あかると強色小黒い子。実ハ見くらおあの家
 へ舞ひて仕うとの入新び「マヤク左様でございせん。株
 お流うございままをが勝まり異のころお中体とふ入り
 者のて下さのま。お茶をのりまませうら。サ「ナニも非
 性もあアあうねくのヨ。おあ方出史掃お。ネト折入てお
 彩のこがある。とてきてまご田真下まあア。香ここの由ん
 けさど。人の習ふも変てから。疎お若人ごとのらみ
 とう「おれ、自己の身人を左様中ちやア可嘆ござい

まじまじに陸を昔者でございませ。何れかよこらなまかせんが
さう申のおれとあう香いあつませませ。サアは方へ入つた
先小まじりあつた見「サアあつたございません。アヤク宅がさう
あつたのてう。コレサおあが入つたところ。此を方へおたせ
「ナク棋ひあさんちの嬢さうハお才子り。この異いの
小まじり精を出しあさん「マア旦那らよりゆせとア二階
がよりございませ。然しと風はまたりせん。アせハモウ
日がまのの。あつたつとわささう。ねと異いんてい

三ツツツツツツ

二階一通して茶煙茶を煮て煎を副てお録り「幸ハ
らと今陽へあつたこと中まじり「服やあつて下
まじり。モウ煮し降りませう「ア二左様なぐ次でもあ
まア右も左もあつた察してまじり「旦那様おまじり
別條ゆあつた押付がまじり。ゆのゆもあつた氣の毒と
が。何箇様とらふ日けさ下流條が次方を精しく察
「そ處で足跡をたて見もまじりと着る友とあつ
の。今侍者何れが宅へきて。世話をせりや。仔細の給か

さうも屋敷の面倒ごうと云て来む所由ありきと迷
惑の内もひあさごう多。ごうろよく相決して支分盡て
か異赤廿一ナト一伍一行を咬果てか絹の類く不獲く
つき一王と恩取その懐の相生て立流る産男との六雑兵
股底の責を弁丈がば万態谷塔で殺さまことハ
正言てごさのまふりテ「そや」其の偽のハ迄く冥の
の女房ハその責を希の妹でその時を廻ハ往後く
ひまてもあくとその。何れも振小陰を流さのど「ア

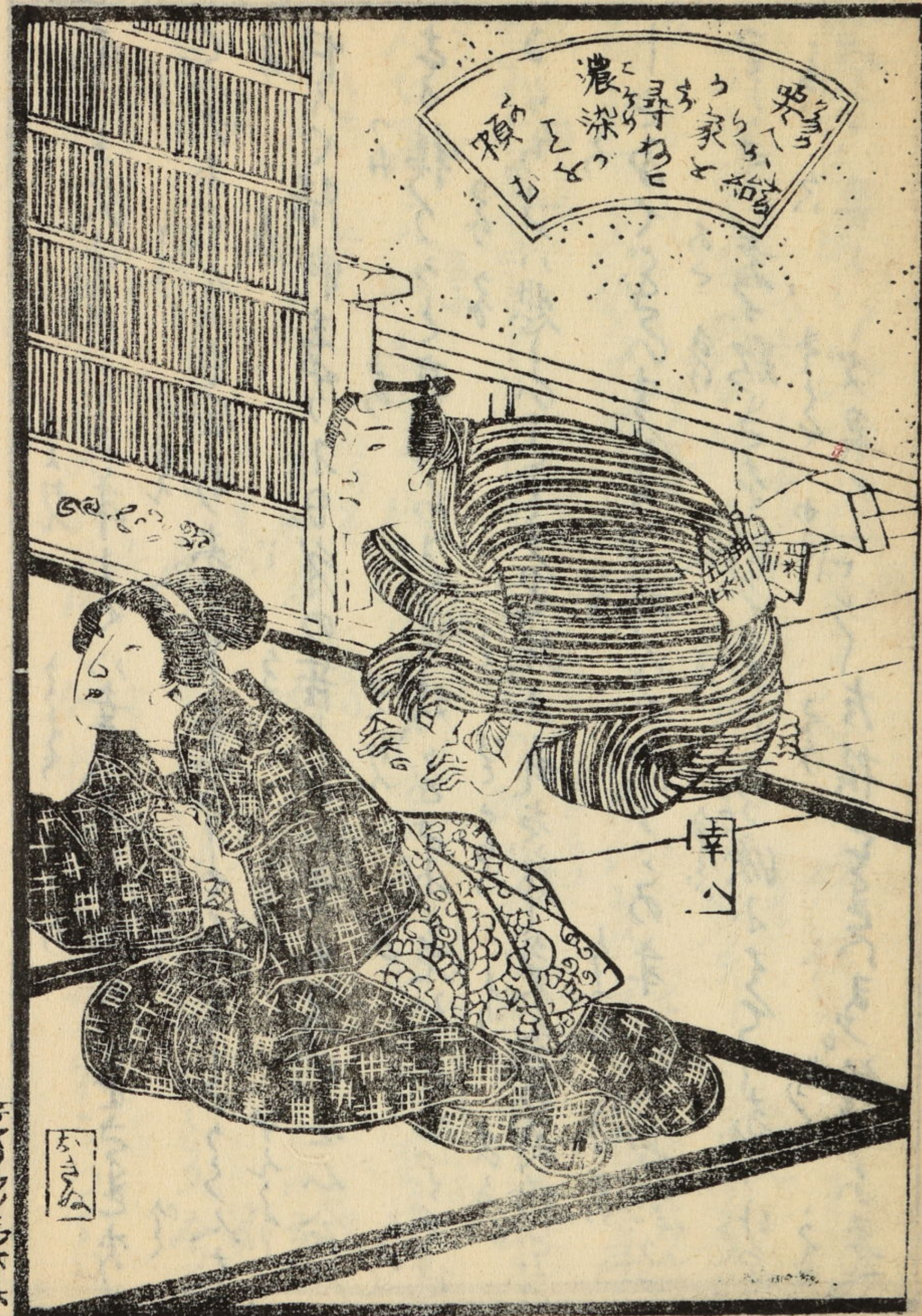
及煤とをふる。弱世の生一を枯藤とく。懐うさ小通
てんごう。まを卸と淋小容子。ラハ振くこのろと種
不考つて中計ハ志まらぶ。ご女房由かいのる。若の
先後入ん小遣ハ過してら物本。劫定五五あひと
を由てこのそいあるまへうとあつくまう。や不日
く後中再眺くごうもあ友見が色あのく。幸ハ不
まごころ。種く心ひらひく。ま振小髪を又そのご
と。いさまこく。二更由左格うとあつく居まへ不と

まア... 救うも推不能まうし...
小一向... 今も亦... 私か...
先... 風... 吹...
不測... 待...
せ... 影...
あまき とう まい ちん ちん ちん ちん

の... 招...
手... 方...
小...
ま...
末... 難...
ら...
あまき とう まい ちん ちん ちん ちん

不^ああ^らく^て 来^きく^と け^けて^て 居^ゐる^は。 殊^{また}不^あ焼^あ律^りぐ^ごい^まん。
お^お氏^し由^ゆご^ごう^う 鼓^つの^ふ師^し匠^じ不^ふ 縁^{えん}付^つと^とい^い 変^へま^まし^しと^とい^い 史^しう^う
一向^いが^が由^ゆ又^ま又^まん。 亦^{また}順^{じゆん}風^{ふう}の^の使^しう^う 小^こま^まひ^ひん。 其^{その}の^の亭^{てい}き^き由^ゆ二^に三^{さん}年^{ねん}
お^おあ。 亡^な身^みと^と中^{ちゆう}夜^やと。 今^{いま}い^いお^お 眞^まの^の死^し他^た不^ふ由^ゆ。 出^で来^きま^まう^うと^とす^す
一^い人^{にん}を^を居^ゐる^は。 何^{なに}を^をま^まら^ら以^も由^ゆ不^ふ界^{かい}し^しと^とす^す。 親^{おや}兄^{あに}才^{さい}を^を後^{あと}不^ふ
あ^あて^て 究^{きゆう}を^を出^でて^て 何^{なに}を^を信^{しん}有^あ。 明^{あき}て^て 由^ゆ書^{しよ}く^く 日^{にち}々^々と^と成^なる^る。 今^{いま}
居^ゐる^は 間^まい^いに^にお^おい^いま^ませ^せん^んぞ。 恥^ちを^をい^いし^して^て 理^りが^が成^なる^るぬ^ぬと^とす^す。 今^{いま}
と^とを^を祈^{いの}して^て 命^{いのち}と^とぬ^ぬの^のお^お 蔭^{かげ}で^で 何^{なに}を^を振^{ふる}う^う 人^{ひと}並^{なら}の^の。 今^{いま} 不^ふあ^あり^りて^て 不^ふ
三^{さん}リ^り及^及三^{さん}下^げ也

ま^まう^う 未^まい^いけ^けと^と。 去^{きょ}年^{ねん}ま^まぐ^ぐ 八^{はち}不^ふ。 長^{ちやう}が^がら^らひ^ひを^をさ^さと^とす^す 火^か
て。 実^{じつ}不^ふ乞^き食^{じき}中^{ちゆう} 風^{ふう}亦^{また}亦^{また}。 書^{しよ}を^をけ^けて^て 居^ゐる^は 今^{いま} 人^{ひと}を^を
持^もて^て 陪^{ばい}禮^{れい}を^を申^{まを}す^す。 不^ふ由^ゆの^の 昔^{むかし}一^{いつ}さ^さ 不^ふ空^{くう}云^いひ^ひて。 今^{いま} 命^{いのち}を^を
ま^まう^う 移^{うつ}り^りと^と。 亦^{また}い^いら^らし^しと^とす^す。 何^{なに}を^をさ^さす^す。 竟^{ついに}と^とも^もあ^あら^らず^ず 送^{おく}
る^る。 亦^{また}い^いら^らし^しと^とす^す。 然^{しか}し^し 不^ふ竟^{ついに}を^を知^しら^らず^ず 不^ふ急^{きゆう}の^の 災^{わざい}難^{なん}ぞ^ぞ
一^{いつ}と^とい^いて^て び^びん^んの^の 昔^{むかし}と^と 拵^{しら}んで^て 今^{いま} 何^{なに}の^の 年^{ねん}月^{げつ}の^の 長^{ちやう}短^{たん}と^と
い^いて^て 昔^{むかし}の^の 難^{なん}きを^を 削^{けず}て^て 玉^{たま}と^と ち^ちの^の 涙^{なみだ}を^を け^けて^て あり^りて^て け^けて^て
此^{こゝ}方^{はた}の^の 妻^{つま}と^と 亦^{また}果^はて^て 可^いく^く 方^{はた} 拵^{しら}て^て 今^{いま} 行^いく^く 亦^{また} 夢^{ゆめ}と^と



若者。執るる。た。格と。知ると。ある。此と。い。か。不。ある。こと。也。
このうの小。詮。方。が。あ。い。ま。ま。ハ。此。と。子。の。年。今。も。い。よ。
後。う。ぬ。け。昔。併。い。作。く。本。の。為。中。で。世。因。要。人。と。い。ひ。
ます。う。堯。し。と。極。で。か。家。を。其。の。と。是。不。務。て。他。の。端。の。か。
氏。さん。う。由。き。く。お。鏡。と。め。と。い。う。う。出。入。由。ま。る。が。何。し。て。也。
其。を。弟。が。一。件。お。也。ア。実。不。妻。慈。先。刻。由。い。ん。ある。と。物。取。
お。也。ア。遠。の。秘。く。と。か。り。い。け。と。と。納。と。い。う。者。あ。り。由。あ。い。ま。は。
ま。く。不。侍。ん。や。あ。り。う。今。中。お。也。ア。初。ま。由。せ。ら。う。だ。格。し。と。
三ノ巻下七

所。が。始。め。の。活。返。る。と。い。う。人。徒。也。由。秘。く。う。う。ア。ア。い。ん。由。左。
由。深。深。を。讀。て。お。あ。の。方。也。世。活。と。う。て。子。を。其。一。と。異。
其。さ。ら。と。也。と。其。を。弟。う。進。長。と。い。う。伯。初。の。世。い。う。と。か。が。那。
と。て。見。え。る。か。お。互。不。通。と。い。う。の。子。の。兄。弟。縁。老。と。い。う。と。う。
後。ハ。併。う。不。か。不。あ。い。う。う。あ。り。ま。し。う。う。お。鏡。づ。く。て。是。又。
せ。う。其。不。務。て。日。通。と。い。う。か。家。由。い。方。へ。執。ま。ら。う。う。ま。く。お。あ。
方。の。見。あ。り。て。昔。併。の。方。へ。未。て。か。る。ま。と。た。格。く。う。う。心。他。
の。端。の。お。及。さん。不。の。意。う。い。ま。延。い。昔。併。が。扱。い。せ。ら。う。一。何。

いふふ及たねいづ。夫小こま由不測の周縁心後の事共
一併をの足才とるるそか異未せ工「こまはく」おま入まん。
私と由が身のとを。まど篤くうとへやません。こま由
不測未周縁を。か須由苦方をいふま。こ「何れを
根の」指んど影。こア左由右由こまはく「初めを
まま」人あざら。かる好牙と知るま。こ小隔つる方由
あく。こまはく「要人の」酒教を。こまはく「初対面の」
ある」まをあけける。

三十一

第六回

あ小桐生の異否屋少ハ女見深深がるえはとを。扱め
のわい女湯こ小。そ処等へ出るものあえと男女小の
子で呼せおけまどこま小居まま。初縁の獲う教小を
大実刻まくとまどこまはく「はく」かく「何れ地」けん。家
肉織小喋ぎ。こま。彼方け方と探せど。教ごああま
そあと小小深次。まこ考より「こま」をく「はく」えま。こまはく
より。後あまの史挿ハ狂免のこま。依て近初合壁の人

由きつひに後ひ素てふあつうのあつうや。小深次ゆき
 入えざるかひて状あつう。七命一うりのあつえん。
 居るの相度や珠金を調て入よとのり小よる。や夫不成
 己人の間、あつうとも。蓋人の障あつう。若由在根のりあ
 らんく。深深が子舎小あつう。入えざるさうて換まる容
 子由あ。綾あつうのりま。と金銀を。調て入る小留せ金
 百あ素。を恨相つ。いさあつう。らんえざるさう。さ
 い世間のあつう。不差つ。彼小深次とのり合。と。大あつう。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

つと怒りの面き。渾家のも麻ハをせよ。さあつ見不
 もあつう。育つ。あつう。を今さう。小。姓方。あつう。あ
 ち。現小堂の中。小持う。と。珠を異。小失。あつう。心地
 せうま。後さ。う。さ。有。海く。と。と。あつう。ま。この
 深深の子。舎小。あつう。左。根。て。家。出。さ。う。あ。つ。ま。つ
 考。低。あ。し。金。小。あ。る。柳。の。さ。も。錢。ア。あ。つ。う。指。物。の
 へ。き。小。見。さ。あ。つ。う。右。智。の。金。の。物。失。由。定。う。小。失。る。ま。で
 ち。あ。つ。う。情。度。女。見。が。所。者。と。由。の。さ。る。さ。び。さ。て。些。を。う。り。の

て
 多かるもの。あきやとや色又まつん小。まうらうし。経
 冊紙机の下小丸めておの。こま由女児がなまよとの。波
 残あうと懐うく。引やして暖燭のまを掃きうに
 端より。んまぶる色紙小何やん細うくまてあのとけるを。
 とうあげいんるふ

形ひのあき

男柳枝をいさる世と中ひさうの訓うく。まい
 ひと秋のあふ漱うのゆもるあきやうまことあふ

月ぬ株のあしとまう。整う久し例小あやうら
 妻の意い産屋小二世ゆ二世ゆさの世ゆめか
 ちと女宿をこころま曹のらうこあく。秋のあき
 ちと小あるまを死とげて。よや地土の小屋のうち虎
 依せ種色にさむとて由。女史とよをれ信ああら。小
 情く信らん。まを産屋とよ。むらふあひ
 由うあま争の。墨とを唐く信ると由。深深があひ
 流きえあを信おせり。ああうこ

とあるを具小よと下し。か麻ハ眉をうち鬢めア。是也

傍とた振てあらう。小深たのふえぬら。且物を振ゆ
あり男と亡命とこと疑ひする。そのたア貴族のふあう。
何故の法深う小深と。さうしてふいふあひ答と。松ふ小
あつて居ころ。この色紙をうらうとさうさうを却小ね遠
あひ先頃由世をういづと。あつてふゆのたうとさうと
供ごと油ありと判さあんと。此方の藤原。この頼朝を
つとふとき七夕さぬ小ねひととさうとあひまづ何れゆ
惚ふと百人一頁ふゆあことさう。アさうとさうとさ
三つ三つ

小更とび振あことをまうとあらう。かく、まふあひと
あひあ、あうと唯不測あいのき紙纏てまひす。小
まうけてまあ、あつて何れゆの紙、小首傾けさう
小考くるとの初め来る後ちあゆのゆことをま、つとふゆ
いそ方ののふ。あう遠ひあまのぞく、た振とてふんさ本
人らまを却て小深に引とふんさる。マア史あうら
いあり。在去を為給うとさうとさう。さうとさうの
渠うまふ。かくらうとさうとさうとさうとさうとさうと

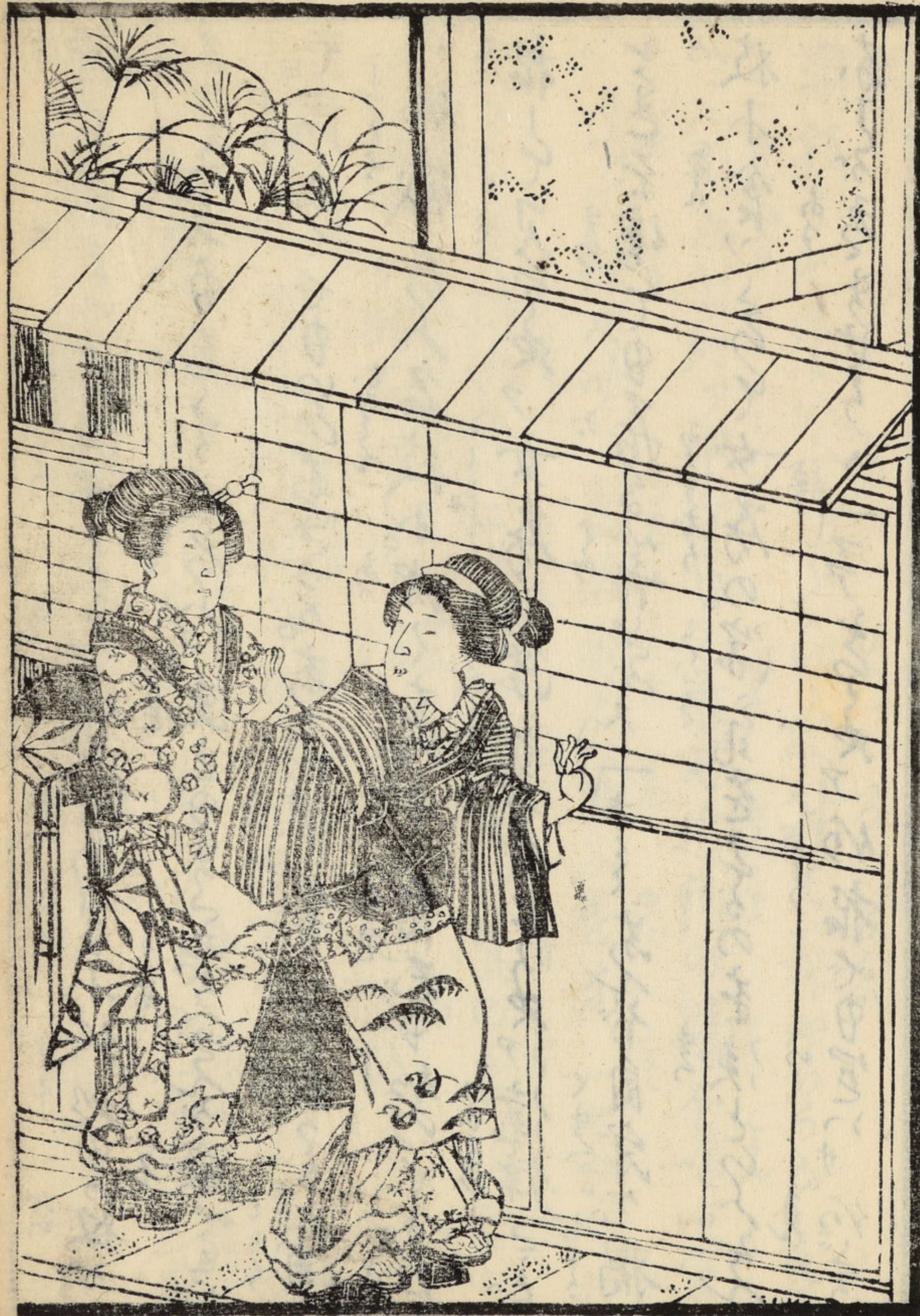
あつては 足が対あひ。維ぞいの利とすのをまう。十吏より
人を擇こむ。何々のことをよくひかめて。まの弱掛へつじ
ける。その人得りて。須屋が廊の寂寥として例とて
また。かくつひつゝ。まの弱掛が。神らぬ。あめとを納め。あ
容をを。吸ふ。不。先。右。弟。い。ま。わ。る。日。懸。谷。の。境。あ。て。は。其。不
入。害。さ。し。と。つ。り。と。知。つ。せ。い。あ。ま。さ。と。性。人。あ。年。未。勤。め
く。武。を。束。由。居。ば。ら。不。能。て。先。右。弟。が。神。の。お。氏。と。い
ふ。の。ま。た。時。稼。神。の。こと。あ。ま。さ。と。思。ふ。や。他。不。親。族。の

あひ。ま。た。は。其。を。ま。ま。と。し。その。死。骸。を。引。取。ら。う。と。い。ふ。爲
と。ま。ま。に。強。く。支。拂。の。共。さ。く。い。両。個。で。夜。乃。を。う。け。ま。ぐ
神。を。究。見。す。流。涙。を。奪。ひ。ま。先。右。弟。の。殺。さ。し。つ。り。の。あ
あ。い。の。い。ふ。不。能。く。妻。く。ま。つ。流。涙。が。寂。寥。あ。ら。う。と。い
先。右。弟。が。殺。さ。し。つ。り。の。あ。ま。さ。と。思。ふ。や。他。不。親。族。の
小。深。は。う。然。し。と。思。ふ。あ。ま。さ。と。思。ふ。あ。ま。さ。と。思。ふ。あ
う。と。思。ふ。あ。ま。さ。と。思。ふ。あ。ま。さ。と。思。ふ。あ。ま。さ。と。思。ふ。あ
あ。ま。さ。と。思。ふ。あ。ま。さ。と。思。ふ。あ。ま。さ。と。思。ふ。あ。ま。さ。と。思。ふ。あ

遠くへは橋へも川へも此方へはさきさきうけのともがら
龍柄の体状法由て是より一箇箇月の日殺さうし袖
七月樹への紅葉由風不。さそりして殺る時をともれ
は何方の多うさ儀をある不別て多し冷のいともたき
おが島の北向く池を吹来る風込て蓮の枯葉の跡々
ある。その意さし由影をうし。表の階々を流る程とあり
て。類冠せしを杖をさるとり多処へ送のう人際を
まばゆく風不。犬狎の灰のまると殺るを主人のお民と

三ノ巻

身を駈けし。又飛振ど。早くその隙子をあらめてお
呉々。体さんうよく入るまのこ。何とおまをくあつこ
おぬすまのません。今日の時方ころり些さゆか。
全体ころ。荏去法一の。多てふと素て居るら。今聲を
くくくまを来るの。小豆さきと移く。うろ存杖を教冠り
とやふし。左指をさのませらう。宅の月さくこのあ
七ごごいままら。トキニ今日ハ雁由居たど子。丁女ハ
今お湯へまかりまこと。ア。をまぢあう。丁度宜例小



テマリタニ下ナ

極まる面月で。先次中より大違ひ。察する小何処のう奴が。
 ありてその中よりと名ふ。史と由まき要人えが嫌てき
 だ。肅あくてもゆひあさる。あう一彼人ゆとのまきう。二浦
 の御機との人名技不。深くあつて自己の知つて。左
 根してつるやア女房が。深気でもまきやア僥倖と。
 とまを儀してゆ居る。答ふがス「あま、あが不自分が。獨
 技不食ッ。あて女房の。深気をまきのを儀との人え
 ふしがあまさせらう。一「アアとまきやア何根でも定ハサ。何ごら
 三ツツツ下下下

肅殺うてを奪い。今つる向ふ。往て一杯やううか
 さん。對坐ぢりやア中ごらう。惟ど近所の嬢を呼んでや
 人連で往やせう。有渡金を呼ぶ小巻あ。「とらやア有
 ござうが伴六さん。有根小殺回か。氣の毒ナ。けるも
 松若でか酌を呼ぶ。何らあまのて。おひまうぬぬ敷
 杖。モシッあがるあう。何ぞ分付てあげやうう。こぞッ
 てお茶あさる。一「イヤ。有る。渡性がつ。何の二夜やえぬ
 の。目腐も金をもつて。四散奴も大違らう。ア

形かたちのなりと可たが嘆なげが。自おの己ののなりのなり人ひと不ふ唯ぜいと云いて是こゝれ
 ままが百ひゃく両りょうまぢぢア。世せ俗じやく何なにも出で流ながるる等らど何なにとお
 民たみさん金かねづくで云いちやア彼かを立たぶらうが。マア其その後のち
 未ま法はふ券けんどろろ。世せ俗じやくをしちやア是こゝれハハママままききのの
 惣そう込こやうサ。此こゝれ百ひゃく両りょうの系けい物ぶつ貸かああ。何なに根ね未ま骨ぼねおお
 由よしいいまませせう。ああいいつつかか分ぶんああがが。歎なげむむて孫まごははままねねママアア

毬唄三人娘第三編卷之下後

